一般論文

性の多様性に関する短期大学生の知識と意識についての一考察
―性的マイノリティに関するアンケート調査から―

A Study on Junior College Students' Knowledge and Attitudes Toward Sexual Diversity
- From a Survey on Sexual Minorities -

佐　野　ありさ，松　井　佳　子
SANO Arisa，MATSUI Keiko

概　要

本研究では、保育者や小学校教員を目指す短期大学生に対して性的マイノリティに関するアンケートを実施し、短期大学生が有する知識の現状と、性的マイノリティに対してどのような意識を持っているのかについて探ることを目的とした。本調査でも先行研究と同様、LGBTあるいはLGBTQという用語を知っている人は88％と、用語自体の認知度は高いことが示されたが、その内容を理解している割合を詳細に調べると半数前後にまで減少し、用語の浸透ほどには性の多様性に関する理解は深まっていないことが明らかとなった。また約96％の学生は、将来保育職や教職についた際、性的マイノリティの子どもに対して何らかの配慮をしたいと考えていたが、逆に「差別になってしまう」「平等でない」「全員の個性を配慮すべき」との考えから、配慮をしたいと思わないという記述もあり、公平性や平等という言葉によってマイノリティに対する合理的配慮がおこなわれない可能性があることも示唆された。

1．はじめに

近年、性の多様性について社会的関心が高まり、LGBTやLGBTQという用語を耳にする機会も多い。Lは心の性が女性で恋愛対象も女性であるレズビアン（Lesbian）、Gは心の性が男性で恋愛対象も男性であるゲイ（Gay）、Bは恋愛対象が同性にも異性にも向くバイセクシャル（Bisexual）、Tは生まれた時の身体の性と心の性が一致せず違和感を持つトランスジェンダー（Transgender）、そしてQは自分の性的指向や性自認についてはっきりしていないクエスチョニング（Questioning）で、これらの頭文字を組み合わせたものがLGBT、LGBTQである。レズビアン・ゲイ・バイセクシャルは、どのような性別の人を好きになるかという性的指向に関するものであり、トランスジェンダーは自分の性別をどう捉えるのかという性自認に関わるものである。

電通による「LGBTQ＋調査2020」（電通2021）によると、LGBTという用語の認知度は、2015年には37.6%であったものが、2020年には80.1％へと急激に上昇し、LGBTという用語はかなり一般に浸透していることが示されている。ただし、用語の認知度が高まっていることは、必ずしも性的マイノリティに対する理解度が高まっていることを意味しない。上記調査でも、LGBT以外の多様な性についてはほとんど知られていないことが分かっている。

この電通による調査では、セクシャリティを出生性、性自認、性的指向の３つの組み合わせで分類し、異性愛者であり、かつ生まれた時に割り当てられた性と性自認が一致する人をストレート層、

それ以外をLGBTQ＋層と定義して調査をおこなっているが、調査対象のうち8.9％の人がLGBTQ＋層に分類されている。LGBT総合研究所による調査（2019）でも、性的マイノリティに該当する人は約10％とされるなど、近年の調査では概ね10％前後の人が性的マイノリティであることが示唆されており、将来保育者や教員となる学生が性的マイノリティに接する可能性は高い。

さらに、ジェンダークリニックを受診した性同一性障害の当事者を対象とした中塚（2017）の調査では、身体が女性で心が男性の子どもの33.6％、身体が男性で心が女性の子ども70％が、小学校入学前には性別違和を自覚しているとされる。しかし性自認や性指向が周囲から受け入れられない場合には、思春期の悩みが深刻になることも懸念されている。また松本（2013）は、人は無意識のうちに性やジェンダーのあり方について、「正しい」「正しくない」、「常識」「異常」という価値判断をつけがちであり、思春期に自覚する前から、「性のあり方が非典型的なことは道徳的に正しくないことである」と刷り込まれてしまう可能性も指摘している。したがって、保育者や小学校教員が性的マイノリティについての知識や理解を深めることは、子どもたちの心に寄り添いつつ、子どもが最も自分らしくいられる環境を提供するためにも非常に重要であると考えられる。

そこで本研究では、保育士、幼稚園教諭、小学校教員を目指す短期大学生に性的マイノリティに関わるアンケート調査を実施し、性の多様性に対する知識や理解の現状について考察したい。

2　研究の目的

本研究は、短期大学生を対象にアンケート調査をおこない、性的マイノリティに関して有している知識、性の多様性に対する意識について探ることを目的とする。LGBTやLGBTQについて理解していると学生自身は感じていても、それが実際には不正確な知識であった場合には、本人の意図に反して偏見や差別に繋がってしまう可能性もあることから、保育者や教員を目指す短期大学生が性的マイノリティについて有している知識の現状を把握した上で、今後の課題について考察したい。

3　方法

⑴　調査の方法

Y短期大学保育科、専攻科保育専攻に在籍する短期大学生209名に対してgoogleフォームを利用したアンケート調査を実施した。調査期間は2021年７月から８月（７月８日、30日、8月10日、11日の計４日）である。アンケートは選択式、記述式をあわせたもので、無記名での調査を実施した。また倫理面への配慮として、研究の趣旨や回答の自由については事前に説明した上でアンケートを実施し、山梨学院短期大学研究倫理審査委員会による審査を受審し、個人情報の取り扱いには十分配慮して研究をおこなった。

⑵　調査項目および手続きについて

アンケートの項目は表１の通りである。

表１　アンケート項目

1．「LGBT」「LGBTQ（QIA・Q+）」という言葉を聞いたことはありますか。
（２、３、４は「ある」と回答した人のみ）
2．初めてLGBTQ（QIA・Q+）について聞いたのはいつ頃ですか。
3．初めてLGBTQ（QIA・Q+）について聞いたのはどのような場面でしたか。（回答は選択式）
4．LGBTの中の「L・G・B・T・Q」とは何か、わかる範囲でお書きください。
（上記の質問後、LGBTQについて一定の理解を共有した上で次の質問に回答してもらうため、公益財団法人人権教育啓発推進センターが作成した啓発リーフレットから、図１の部分を表示した上で、次の質問に進んだ。）
5．もし以下の人に「自身が性的マイノリティ（LGBT等）」であることを打ち明けられたら、どのように思いますか。（友人、家族、保育者や教員として担当する子ども、テレビタレントやインフルエンサーなどの有名人それぞれについて回答は選択式）
6．どのような性別の人を好きになるかという性的指向や、自分の性をどのように認識しているかという性自認は、自分自身で好きなように選べ、本人の意思や努力で変えられると思いますか。（回答は選択式）

7．今まで、学校の授業で性的少数者（LGBT等）に関することが取り上げられたことがありますか。（回答は選択式）
8．性的少数者（LGBT等）に関することを学んでみたいと思いますか。（回答は選択式）
9．「思う」「少し思う」と答えた方にお聞きします。どのようなことを学びたいと思いますか。（回答は選択式）
10. 前の質問において選んだものの中で、１番学びたい気持ちが大きいのはどれですか。
11. 「あまり思わない」「思わない」と答えた方にお聞きします。なぜそのように思いますか。（自由記述）
12. あなたが保育職や教職についた際、性的マイノリティ（LGBT等）に該当すると思われる子どもに対して、保育や教育の中で何か配慮をしたいと思いますか。（回答は選択式）
13. 「あまり思わない」「思わない」と答えた方にお聞きします。なぜ、そのように思いますか。（自由記述）

今回の調査ではLGBTやLGBTQという用語を自分では知っていると考えている回答者が、実際にはどのように理解しているのかを探るため、１から４は用語の定義をしない状態で質問した。その後は、性的マイノリティに関して一定の共有理解をした上で質問に回答してもらうため、公益財団法人人権教育啓発推進センターが作成した啓発リーフレットから、LGBTという用語を説明した箇所を、図１のようにスライドに表示した上で用語の説明をおこなった。回答者の中には、用語自体には馴染みがあっても、LGBTとは同性愛者のことのみを意味していると思い込んでいたり、トランスジェンダーと同性愛を混合するなど、性的マイノリティについて限定的な知識しか有していない場合も想定し、各自の思い込みに基づいたまま５以降の質問に回答することを避けるためにこのような手続きをとった。

（引用）公益財団法人　人権教育啓発推進センター
啓発リーフレット『多様な性について考えよう！
～性的指向と性自認～』より[1]

図１　アンケート調査のスライドの一部

４．　結果

⑴　「LGBT」「LGBTQ」という用語の認知度について

「LGBT」「LGBTQ（QIA・Q＋）」などの言葉を聞いたことがあるかという質問に対して209人中140人が「ある」、44人が「LGBTのみある」と回答し、あわせて88％がこれらの用語を聞いたことがあった。聞いたことがないと回答した人数は、全体の12％にとどまった。（図２）

「ある」または「LGBTのみある」と回答した人が、その用語を初めて聞いた時期は、高校が最も多く85人、次いで72人が中学校、19人が大学、８人が小学校だった。（図３）また、それがどのような場面であったかという質問には、185人中57人が「学校の授業または先生」、56人が「インターネット」とほぼ同数であった。次いで、42人が「TV」、24人が「友人・知人」を通じてLGBTやLTBTQという用語を知ったと回答した。（図４）

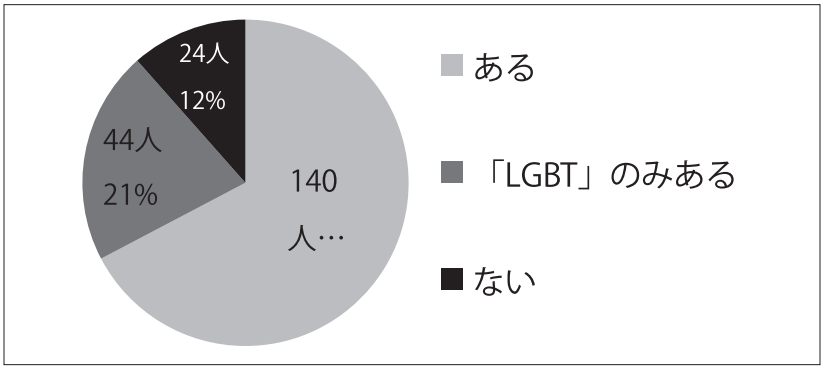

図 2　「LGBT」「LGBTQ（QIA・Q＋）」などの言葉を聞いたことがあるか

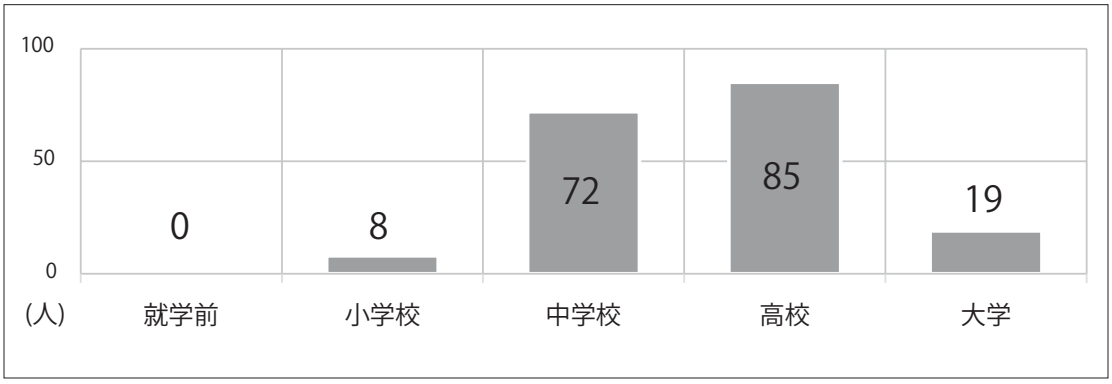

図 3　「LGBT」「LGBTQ（QIA・Q＋）」という用語を知った時期

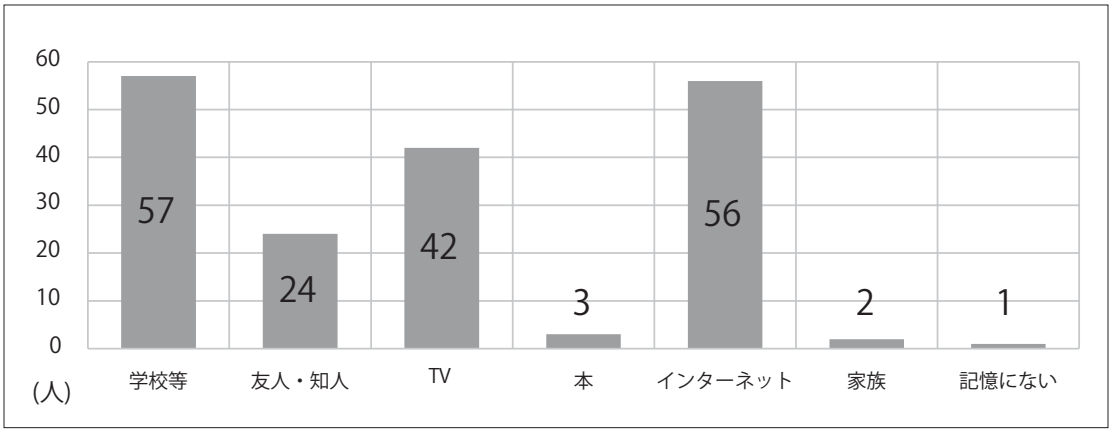

図 4　「LGBT」「LGBTQ（QIA・Q＋）」という用語を知った場面

次に、これらの用語を聞いたことがあると回答した184人に対して、LGBTまたはLGBTQのそれぞれの頭文字が表す意味を記述してもらった。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、クエスチョニングという言葉を正確に記述したのはLが20人、Gが20人、Bが16人、Tが10人、Qが10人であった。これに、記述内容から理解していると判断できる回答を加えると、LGBTについては、Lが98人で全体の53%、Gは124人で67%、Bは104人で62%、Tは84人で46%と、用語を聞いたことがある人の半数前後がその内容について理解しているという結果となった。他方Qに関しては、「理解」「おおよそ理解」している人を合わせても22人で、LGBT以外に存在する多様な性についての認知度は低いことが分かった。（図5）

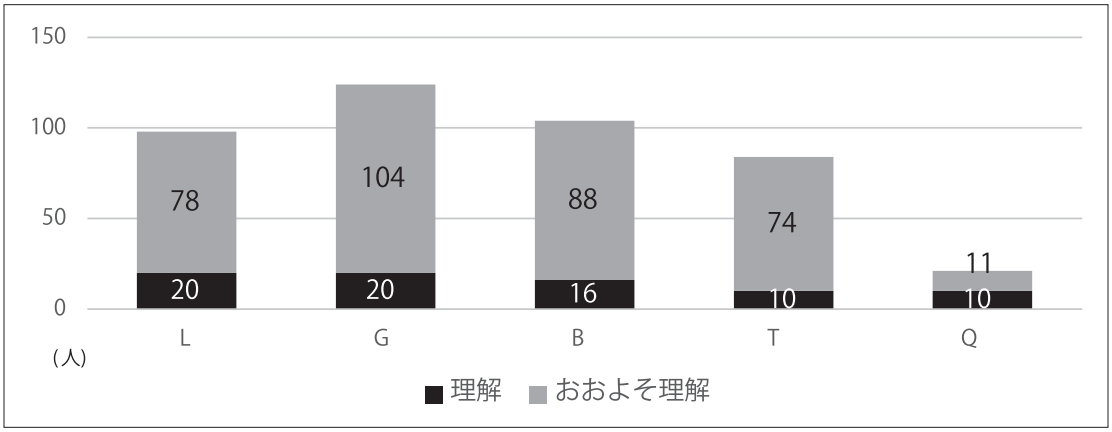

図 5　LGBTQそれぞれの頭文字があらわす意味について

⑵　性の多様性に対する意識について

友人や家族、保育者として担当する子どもなど異なる関係性の相手から、自身が性的マイノリティであることを打ち明けられた場合の感情について尋ねたところ、回答は図 6 のような結果となった。まず、友人から打ち明けられた場合「嫌だとは思わない」と回答したのは159人、「あまり嫌だとは思わない」が40人、「少し嫌だと思う」が 8 人、「嫌だと思う」と回答したのは 1 人だった。次に、家族から打ち明けられた場合「嫌だとは思わない」と回答したのは118人、「あまり嫌だとは思わない」が40人、「少し嫌だと思う」が37人、「嫌だと思う」と回答したのは13人だった。保育者や教員として担当する子どもから打ち明けられた場合「嫌だとは思わない」と回答したのは174人、「あまり嫌だとは思わない」が29人、「少し嫌だと思う」が 4 人、「嫌だと思う」は 1 人だった。最後に、テレビタレントやインフルエンサーなどの有名人から打ち明けられた場合「嫌だとは思わない」と回答したのは175人、「あまり嫌だとは思わない」が24人、「少し嫌だと思う」が 9 人で、「嫌だと思う」という回答はなかった。

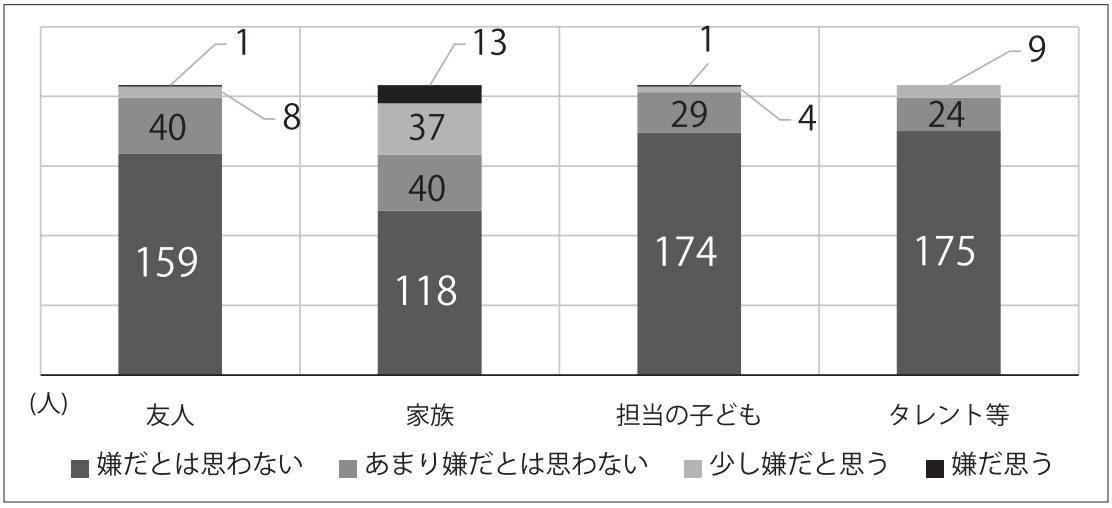

図 6　性的マイノリティであることを打ち明けられた場合の気持ち

今回の調査では、「少し嫌だと思う」「嫌だと思う」という回答が最も多かった対象は、回答者に関係の近い間柄である家族で、最も少なかったのは保育者や教員として担当する子どもという結果になった。奥村ら（2017）による教員養成系大学生を対象としたLGBTに関する調査においても、家族や友人もしくは自身と関わる児童・生徒の中にLGBT当事者がいると想定した場合、「児童・生徒」から「友人」へ、そして「家族」へとより間柄が親密になるほど抵抗感が増すことが明らかになっている。また、釜野ら（2016）による性的マイノリティに関する全国調査においても、近所の人、職場の同僚、きょうだい、自分の子どもが同性愛者である場合や性別を変えた場合の反応について、より関係が近いほど嫌悪感を抱く人が多いことが明らかにされている。本調査でもこれらの先行研究と同様の傾向がみられたものの、タレントなど関係性の遠い対象以上に、自分が受け持つ子どもに対して「少し嫌だと思う」「嫌だと思う」と感じた人数が少ないという結果となった。

次に、性的指向や性自認は自分自身で好きなように選ぶことができ、本人の意思や努力で変えられると思うかという質問に対しては、145人もの人が「思う」と回答し、全体の70％となった。（図 7 ）実際には、性的指向や性自認は、自分の意志や努力で変更したり、選べるようなものではないからこそ性の多様性を承認することが求められている。LGBTやLGBTQなどに対する言葉の普及度と、性の多様性に対する理解度との間にずれが存在していることが示唆された。

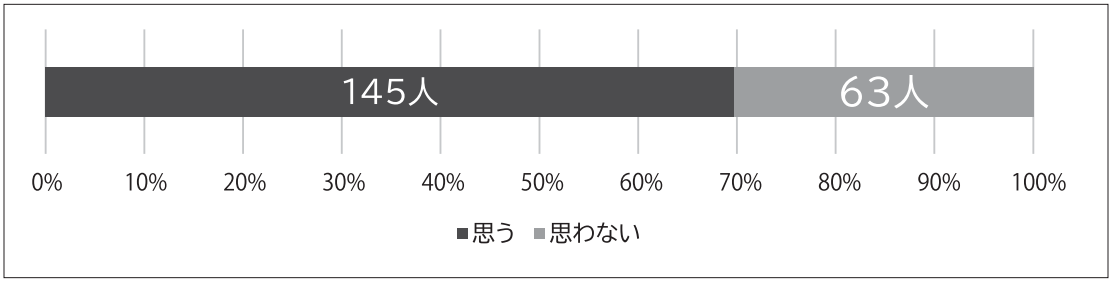

図 7　性的指向や性自認は意志や努力で変えられると思うか

⑶　性的マイノリティに関する学習機会について

学校において性的マイノリティに関する内容を含む授業を受けた経験については、約66％の137人が「ある」と回答し、経験がないと回答したのは34％の71人であった。学んでみたいかどうかという学習の意欲を問う質問に対しては、90％以上の192人が「思う」「少し思う」と回答した。他方、「あまり思わない」「思わない」と回答したのは16人であった。

「思う」「少し思う」と回答した192人を対象として、性的マイノリティに関してどのようなことを学びたいか、表 2 に示した10項目から複数回答可で選択してもらった。最も多くの人が選択したのは、「③性的少数者が困っていることについて」で、192人中124人が学びたいとした。これに対して最も少なかったのは「①性的少数者に関する定義」で、選択したのは22人にとどまった。ただし定義に関しては上述の通り、本調査内で事前に説明していたことが回答に影響した可能性もある。それぞれの選択肢を選んだ人数については図 8 に示した。

表 2　学びたい内容に関する質問の選択肢

①性的少数者に関する定義
②性的少数者の割合について
③性的少数者が困っていることについて
④性的少数者への配慮について
⑤性的少数者に配慮した学級運営について
⑥性的少数者であることをカミングアウトされた時の対応について
⑦性的少数者が受けやすいいじめについて
⑧性的少数者に関しての保護者対応について
⑨性的少数者への支援に関する法・制度について
⑩その他

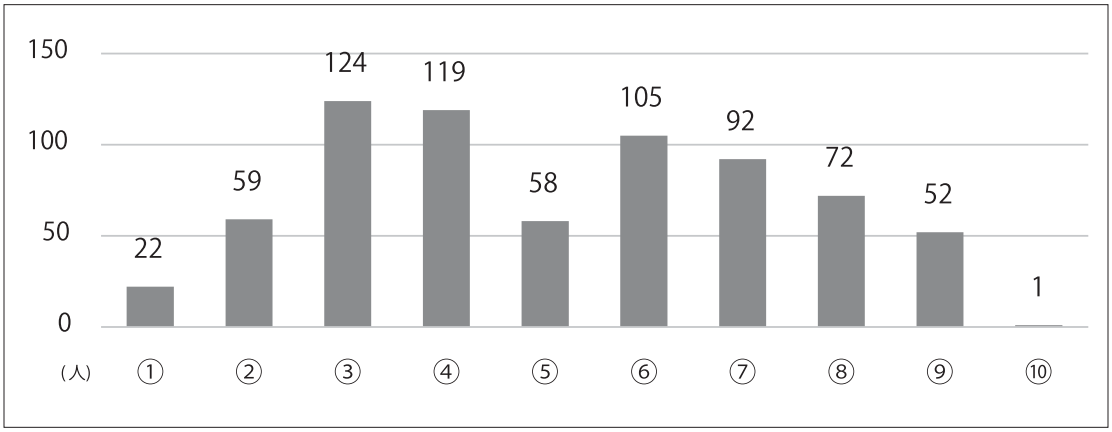

図 8　性的マイノリティについて学んでみたいこと（複数選択可）

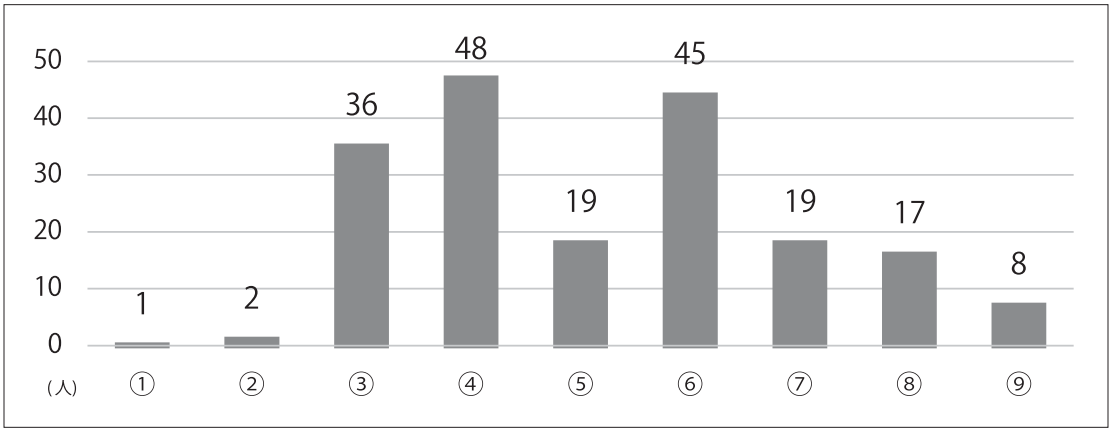

図 9　性的マイノリティについて最も学んでみたいこと（単一選択）

次に、10項目のうち最も学びたいものを単一で選択してもらったところ、「④性的少数者への配慮について」が48人で最多となり、45人の「⑥性的少数者であることをカミングアウトされた時の対応について」、36人の「③性的少数者が困っていることについて」が続いた。（図 9 ）将来、保育者や教員を目指している短期大学生が、性的マイノリティがどのようなことに困っていて、どのような対応が求められているのかなど、子どもたちに寄り添った対応を探るための学びの機会を求めていることが分かった。

他方、学んでみたいと「あまり思わない」「思わない」との回答した16人に対して、なぜそう考えるのかについて自由記述で回答してもらった。興味がないなど、性の多様性に対する関心が低いことを示す回答が多かったが、他には、「知らなくても平等に接することができると思うから」「私は女の子とも男の子とも付き合えるから」など、性の多様性を受容しているから学ぶ必要がないとしているような回答もあった。

表 3　性的マイノリティについて学びたいと思わない人の理由（自由記述）

（「あまり思わない」「思わない」と回答した人の記述）
- 自分が思ってるLGBTやそもそもあまりLGBTに関与しない
- 特に気にはならない
- 知らなくても平等に接することができると思うから
- あまり興味がないから
- 人の自由でそこまで興味がないから。
- 興味無い
- そういう人もいるから
- 難しい問題だと感じたから
- 私は女の子とも男の子とも付き合えるから。
- あまり興味がない

㈱　原文のまま記載した。

⑷　子どもに対する配慮について

保育職や教職についた際、性的マイノリティに該当すると思われる子どもに対して何か配慮をしたいと思うかという質問に対しては、171人が「思う」、29人が「少し思う」、8人が「あまり思わない」と「思わない」という回答で、大半が何らかの配慮をしたいと感じていた。

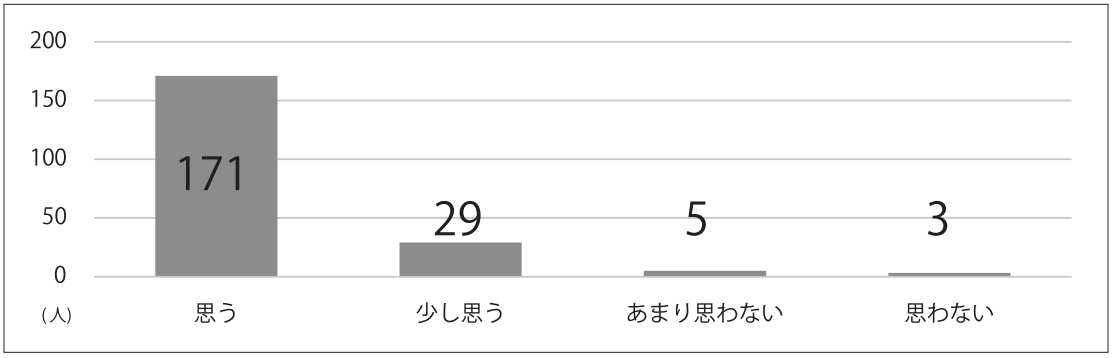

図10　性的マイノリティの子どもに何らかの配慮をしたいと思うか

逆に、配慮をしたいと思わないと回答した人に対して、その理由を自由記述で述べてもらったものを表4に示した。記述には、「差別になってしまうから」「みんな変わらない子どもたちだから」「性的少数者のみを配慮するのではなく、全員の個性を配慮すべきと思うから」「平等でない場面が出てきてしまうと思うから」などの回答があり、性的マイノリティに対して何らかの配慮をすることが不公平や差別に繋がるという考えが目立った。

表 4　配慮をしたいと思わないと回答した人の記述

- 見た目や、トイレ、服装など他の子と異なることもあると思うが、みんな好きなようにすればいいので、性的少数派のみを配慮するのではなく、全員の個性を配慮すべきだと思うから。
- 性別がなんであろうとみんな変わらない子どもたちだから。
- 平等でない場面が出てきてしまうと思うから
- 私も悩んだことがあるから。
- 今のところ理解できないから
- 差別になってしまうから
- 少なくないと思うから

㈜　原文のまま記載した。

5．考察

今回の調査では、性的マイノリティを表すLGBTという用語は広く浸透していることが改めて明らかになった一方で、LGBTQはあまり知られていなかった。電通による「LGBTQ+調査2020」（2021）においても、回答者6240人のうち、約88%がバイセクシュアルという「言葉も意味も知っている」と回答し、レズビアン・ゲイの項目に至っては95%以上がその「言葉も意味も知っている」と回答している一方で、トランスジェンダーやトランスセクシュアルの項目では、「言葉も意味も知っている」と回答したのは約64%にとどまり、「聞いたことはあるが、意味は知らない」という回答が28%であった。またQ＋の項目では「聞いたこともなく、意味も知らない」という回答が75%以上であったが、本調査でも、LGBTという用語は広まっているものの、LGBT以外の性の多様

性についてはあまり知られていないという同様の結果となった。

また本調査では、LGBTまたはLGBTQという用語を知っているかを問うだけでなく、その内容について記述してもらった。用語を聞いたことがあると回答したのは本調査協力者の88%にのぼったが、その意味を正しく理解している人はLが53%、Gは67%、Bは62%、Tは46%、Qについてはわずか11%にとどまり、回答者自身はLGBTについて知っていると感じていても、それが必ずしも正しい知識とは限らないことが明らかになった。性的指向や性自認を、自分の意思や努力で変えられると考えている人も全体の70%にのぼり、ここでも性的マイノリティに関する正確な知識が広まっているとは言えない状況が示唆された。その一方で、保育者や小学校教員を目指す短期大学生の多くが、性的マイノリティについて学び、知識を深める機会を得たいと考えていることも明らかとなった。

性的マイノリティに対する意識に関しては課題も見出された。上述のように、性的マイノリティの子どもに対して特別な配慮をしたいと思わないと回答した人の中には、その理由について、「差別になってしまうから」「みんな変わらない子どもたちだから」「性的少数者のみを配慮するのではなく、全員の個性を配慮すべきと思うから」「平等でない場面が出てきてしまうと思うから」という記述があった。「平等でない」「全員の個性を配慮すべき」「みんな変わらない子ども」など、一見、公平性を重んじ、多様性を考慮しているかのように見える言葉によって、マイノリティに対する合理的配慮がおこなわれない可能性も示唆された。

日高（2021）による教員を対象にした調査では、出身養成機関でHIV・AIDSについて学んだことがあるのは約30%、性感染症について学んだことがあるのは約29%であったのに対し、同性愛については約12%、性同一性障害については約13%と、性の多様性に関する学びの機会が少ないことが指摘されている。また矢崎・本多（2018）は、児童からの相談を受けて初めて性的マイノリティへの支援を検討し始める学校が多く、そもそも相談経験がない学校では当事者の存在が見過ごされ、支援の必要性がなかなか認識されないことを指摘している。篠原と松井（2021）による小学校教員に対する調査でも、調査協力者102人のうち44%の教員が「ホモ」「おかま」「おねえ」などの言葉を子どもが使っているのを聞いたことがあったが、それが差別的用語であると認識されていない場面も少なくないことが指摘されている。子どもが安定した学校生活を送るためにも、必要な支援や合理的配慮を受けられる環境が整っていることは重要であり、そのためには何よりも子どもと接する保育者や教員が性的マイノリティに対する正しい知識と理解を持つことが求められていると言えるだろう。

以上、本研究では、保育者や小学校教員を目指す短期大学生の性的マイノリティに関する知識や、性の多様性に対する理解の現状について、アンケート調査をもとに考察をしてきた。本研究では、性の多様性対する意識を探る一つの手段として、性的マイノリティを表す用語として現在最も知られていると考えるLGBTとLGBTQを使用したが、性の多様性について意識した用語として、LGBTsやLGBT+といった言葉が使用されることもある。ただし吉本（2018）も述べているように、この複数形のsや+の部分に該当する人々がマイノリティの中のマイノリティとして扱われていると感じてしまう可能性もある。性の多様性の中には当然マジョリティの性も含まれており、性的マイノリティに対して正しい理解を促進することは大切であるが、全ての人に関わる問題として性の多様性についてとらえていくことも必要である。近年では、性の多様性についてSOGIという用語も使われ始めている。SOGIは、性的指向（Sexual Orientation）のSOと、性自認（Gender Identity）のGIの頭文字をとったものであり、性の多様性について性的マイノリティだけを取り上げる枠組みではなく、マジョリティである異性愛者も含めたすべての人を包摂する枠組みである。将来、保育者や小学校教員として子どもと接する学生に対しても、社会的排除へと繋がらず、全ての人が多様性の一構成員であると認識できるような学びを提供することが望ましいと考えられる。

引用文献・調査

- 日高庸晴,2021,『子どもの"人生を変える"先生の言葉があります2021』,（https://www.health-issue.jp/teachers_survey_2019.pdf, (2021年12月27日最終閲覧)
- 公益財団法人人権教育啓発推進センター,「多様な性について考えよう！～性的指向と性自認～」,（https://www.moj.go.jp/JINKEN/LGBT/index.html）, (2021年12月27日最終閲覧)
- 松本洋輔,2013,「性同一性障害とは:若年受診者における診療のコツ」,『小児保健研究』,No.72(2),pp223-pp226,（https://www.jschild.medall.net/Contents/private/cx3child/　2013/007202/018/0223-0226.pdf）(2021年12月27日最終閲覧)
- 中塚幹也,2017,『封じ込められた子ども、その心を聴く－性同一性障害の生徒に向き合う－』ふくろう出版
- 奥村遼・加藤進,2017,「教員養成系大学生が有するLGBTの知識・理解・学習経験に関する調査研究：T大学におけるアンケート調査を手がかりに」『東京学芸大学紀要』,68（2),pp.1-10.
- 篠原亜美・松井佳子（2021),「小学校における性的マイノリティ支援と理解に関する考察－小学校教員に対する質問紙調査を通して」『山梨学院短期大学紀要』, 41巻, pp.91-102.
- 矢崎胡桃・本多明生,2018,「我が国の小学校におけるセクシュアル・マイノリティ支援に関する実態調査」,『日本心理学会大会発表論文集』,82,pp1023,（https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/82/0/82_3AM-120/_pdf/-char/ja）
- 吉本圭佑,2018,「LGBTからSOGIへの意識転換の重要性：セクシュアルマイノリティに関する龍谷大学のアンケート結果から」,『龍谷政策学論集』,No.7, pp177-191.

（調査）

- 電通,2021,『LGBTQ＋調査2020』（https://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2021023-0408.pdf), (2021年12月27日最終閲覧)
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也, 2016, 科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ（研究代表者 広島修道大学　河口和也）編,『性的マイノリティについての意識―2015年全国調査報告書』,（http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf), (2021年12月27日最終閲覧)
- LGBT 総合研究所,2019,『LGBT意識行動調査2019』（https://hipstergate.jp/wp-content/uploads/191126_Release.pdf）, (2021年12月27日最終閲覧)

本研究は、山梨学院短期大学「人の研究に関する研究倫理審査」の承認を受けた。（承認番号2021014）

---

[1] このリーフレットは、本調査を行なった時点では法務省ホームページから閲覧できたが、現在はそのアドレスからは閲覧することができない。現在は、兵庫県のHP内の多様な性に関するページ（https://web.pref.hyogo.lg.jp/kf06/documents/lgbt4.pdf）や、長崎県大村市のHP内の人権啓発のページ（http://www.city.omura.nagasaki.jp/kyoudou/kurashi/shiminkyodo/jinken/documents/ippan.pdf）などで閲覧可能である（2022年11月30日最終閲覧)。